

「現代アート」ってどうでしょう？

野口玲一

芸術文化課芸術文化調査官

さ いきん「現代アート」という呼称をしばしば耳にします。美術という語はアート(art)の訳として明治時代に作られたものですから、その意味で「現代アート」＝「現代美術」といえます。しかし改めて言い換えがなされているという事は、何らかの変化に対応する意図がある訳で、この稿ではそれについて考えたいと思います。

2011年の今、アートはどこでも観られるものになりました。少なくとも、美術館が現代美術をリードする現場だった時代は過ぎ去ったかに見えます。税收減により美術館の予算が削減されたのに加え、平成15年に導入された指定管理者制度によって、疲弊を余儀なくされている施設が多くあります。またアートの表現が飛躍的に拡張されている現況において、美術館はむしろ窮屈な施設として認識されているのかもしれない。そうした前提にあつて注目されるのがアートセンターや、オルタナティブ・スペースといった場です。アートに特化せず、音楽やダンスなど他分野との協働作業も盛んで、作家が滞在しそこで制作発表し、観客と交流するといった多角的な機能を備



東京都千代田区の旧練成中学校を改修して誕生したアートセンター
[3331 Arts Chiyoda]

えた拠点が多く生み出されています。こうした活動において、

公的機関だけでなく企業やNPOの果たす役割が大きくなって

近 年の、地域の活性化にアートが起用されることが多いの

指摘しておくべきでしょう。越後妻有アートトリエンナーレといった大規模な地域展が次々と開催され、観光と人の交流と鑑賞が一体になったような体験がなされるようになって

います。

またアートに対して、ギャラリーの影響力が格段に高まったことも見逃せません。美術館で新進作家が取り上げられる機会が減少してしまつたこともあるのですが、国際的な市場を前提とした新世代のギャラリーが活躍することで、新しい作家の評価をギャラリーが決めるようになっています。もちろんそこで重視されるのは「売れる」という価値です。こうした状況のもと、それまであつたような難解な理論に基づく作品が敬遠さ

れ、ポップカルチャー、とくにマンガやアニメとの接近がはかられた作品が多く見受けられるようになりました。

こうした状況下で現在のアートには、審美的であることより、コミュニケーションやエンターテインメントといった要素が強く求められているようになってきました。おそらく美術からアートへの言い換えは、このような状況の変化に対応しているのでしょう。この動きには抗い難いものがありますが、それによって置き去られるものがないか、それだけは意識していたいと考えます。



海外からもギャラリーが参加する「アートフェア東京2010」会場風景
Photo by 岩下宗利 提供：アートフェア東京